2022年度第36回日本音声学会全国大会
2022.9.24-25（神戸学院大学ポートアイランド第1キャンパス）

高知方言における文末詞gaによる無核化とアクセント単位

中澤 光平
（信州大学）
kohein@shinshu-u.ac.jp

1. 本発表の目的

- 高知方言（高知県高知市周辺で伝統的に話されている方言）では，文末詞ガ（例：着るガ，見るガ）が付くとピッチの下がり目が消える。
- この現象を発表者の調査データに基づいて詳細に記述するとともに，高知方言のアクセント単位について論じる。

2

2. 先行研究

2.1. 高知方言

- 高知県の方言は大きく東部～中部方言と西部方言に分かれ，前者を土佐方言，後者を幡多方言などと呼ぶ（上野編2020: 2）。
- 高知市や南国市の方言は土佐方言の大部分を占める高知地区の方言に属する。
- 本発表では高知市周辺の方言という意味で，高知市，南国市で話される諸方言を高知方言と呼ぶことにする。

3

2.1. 高知方言

http://hougen.sakura.ne.jp/shuppan/2017/3-14.pdf より

4

2.1. 高知方言

- 高知方言の音声・音韻的な特徴（80歳～？）
  - 語中のガ行子音とダ行子音の前鼻音
  - ジ[ʒi]，ズ[zu]，ヂ[˜dʒi]，ヅ[˜dzu]の区別
- 形態音韻論的な特徴
  - ナ行変格活用シヌル「死ぬ」，イヌル「往ぬ」
  - サ行イ音便(例：ダイタ「出した」)
  - キーテ「着て」，ニーテ「煮て」，ネーテ「寝て」
  - 助詞ワ「は」が前の語と融合(例：ムカシャー「昔は」)

5

2.2. 文末詞ガ

- 高知方言では「のだ」の意でガヤ（老年層ではガジャも）が用いられる（中井編1997: 216）ように，準体助詞にガが用いられる。
- ガは「上昇のイントネーションを伴って，文末に位置し，疑問を表す」（上野編2020: 131）ことがある（共通語「行くの？」：行くガ？）。

6

3. 問題の所在

3.1. 高知方言のアクセント体系

- 高知方言のアクセントは，京都や大阪と同じく，2つの式および下げ核（核）の有無と位置で記述される（中井編1997）。
- ピッチが相対的に高い式をH，相対的に低い式をL，核の有無と位置を数字，でH0，H1，L0，L2，…のように表すと，具体的な音調は次のようになる。

3.1. 高知方言のアクセント体系

(1)

H0	H–H	HH–H	HHH–H	HHHH–H	HHHHH–H	HHHHHH–H
H1	H–L	HL–L	HLL–L	HLLL–L	HLLLL–L	HLLLLL–L
H2			HHL–L	HHLL–L	HHLLL–L	HHLLLL–L
H3				HHHL–L	HHHLL–L	HHHLLL–L
H4					HHHHL–L	HHHHLL–L
H5						HHHHHL–L

3.1. 高知方言のアクセント体系

(1)

L0	L–H	LH–H	LHH–H	LHHH–H	LHHHH–H	LHHHHH–H
L2		LH–L	LHL–L	LHLL–L	LHLLL–L	LHLLLL–L
L3				LHHL–L	LHHLL–L	LHHLLL–L
L4					LHHHL–L	LHHHLL–L
L5						LHHHHL–L

中井（1997: ivより。-Xは助詞ガのアクセント）

- 近畿周辺の方言には式と核の位置で音調が指定されるアクセントが分布（中井編2002）。
- 式と核で指定される音調およびその範囲を本発表ではアクセント単位と呼ぶ。

3.2. アクセント単位

- アクセントの捉え方として，H，Lという単位の連続とみなす**調素観**と，静的な段階ではなくピッチ変動の動きとして捉える**方向観**とが大きく対立（上野2003）。
- 調素観と方向観には次のような課題がある。

(2) a. 調素観：HとLの出現が大きく制限されている。

b. 方向観：アクセント単位の規定が必ずしも明確でない。

3.2. アクセント単位

- 拍（モーラ）ごとにHとLが指定されているなら，理論上実現可能な数（2^n）に対して実際に現れるパターンははるかに少ない（例：5モーラ語は理論上32通りだが，実際は9通り）。
- HとLの出現の制限は通時的変化の結果（かつてはHとLがもっと自由に配置されていたが徐々に制限を強めていった）とすれば大きな問題ではないかもしれないが，それでも共時的な記述としては無駄が多い。

3.2. アクセント単位

- アクセント単位：アクセント以外から規定できなければ循環論に。
- アクセント単位は文法的単位である語や文節と概ね一致。しかし，
  – 助詞や助動詞は個別にアクセント上の振舞いの記述が必要（中井1997: 204–231）
  – 1語が複数のアクセント単位からなる場合

など，アクセント単位を他から規定するのは困難。

3.2. アクセント単位

- 一方で，方向観によるアクセントの記述の方が共時的には無駄が少なく合理的。
- そのため，方向観によるアクセント記述の基本的概念であるアクセント単位の認定基準について，高知方言を例に考察を行う。

4. 調査と結果

4.1. 調査内容

- 2018年～2022年に高知市および南国市で実施。調査者は発表者1人。本発表の分析に用いるデータは次の4名の話者のデータ。

(3) 話者A　藤本　眞事（1932年生，男，南国市）
　　話者B　讃井　侑三（1943年生，男，南国市）
　　話者C　川村　忠義（1944年生，男，南国市）
　　話者D　岡本　純一（1948年生，男，高知市）

4.1. 調査内容

- 方法は発表者が作成した調査票に基づく面接調査。
- PCMレコーダー（Olympus製LS-100）でWAVE形式モノラルで録音。
- 話者Bと話者Cは同席で調査，話者Aと話者Dは1対1かつ録音にはAKG C520のヘッドセットを使用（話者BとCは内蔵マイクで録音）。

4.2. 調査結果

- 基本的なアクセントは先行研究のとおり。

H0	a.	HHHH	アメダマ，フデバコ，ユキドケ，...
H3	b.	HHHL	カンブリ，クジビキ，シブカキ，...
H2	c.	HHLL	キズグチ，ホンダナ，ミギガワ，...
H1	d.	HLLL	オリガミ，テンゴク，ワルクチ，...
L0	e.	LHHH～LLHH	アセダク，ウミガメ，ナガグツ，...
L3	f.	LHHL～LLHL	アマグリ，イガグリ，ウブゴエ，...
L2	g.	LHLL	イトグチ，クスダマ，ソトガワ，...

4.2. 調査結果

- 文末詞ガが付くと，次のような音調の交替が見られた。

(5) a.	「着る」	HH	キル	HH-LL	キルカエ
		HH-H	キルガ	HH-H-LL	キルガカエ
b.	「見る」	LH	ミル	LH-LL	ミルカエ
		LH-H	ミルガ	LH-H-LL	ミルガカエ
c.	「居る」	HL	オル	HL-LL	オルカエ
		HH-H	**オルガ**	**HH-H-LL**	**オルガカエ**

（上昇のイントネーションは省略）

4.2. 調査結果

- ガが付くとHL「居る」のような下がり目が消える（HL → HH-H）。
- 下がり目の消失はハナHL「花」→ハナノHH-H「花の」，オトコHHL「男」→オトコノHHH-H「男の」のように助詞ノでも見られるが，ノではH−2（HL, HHL, HHHL, ...）かつ名詞の場合のみ。
- 文末詞ガはH−2に限らず下がり目が消え，品詞も限定されない。

4.2. 調査結果

(6) a. LHL ヨンダ「読んだ」 → LHH-H ヨンダガ
b. HLL ヨマン「読まない」→ HHH-H ヨマンガ
c. HHL アマイ「甘い」 → HHH-H アマイガ
d. HLL ニガイ「苦い」 → HHH-H ニガイガ
e. HHLLL アマカッタ → HHHHH-H ～ガ
f. LHLLL ニガカッタ → LHHHH-H ～ガ
g. HLLLL ウゴキダス→ HHHHH-H ～ガ
h. LHHL(L)LLL ～ LHHH(L)LLL ヨミヨラ(ン)ザッタ
→ LHHH(H)HHH-H ヨミヨラ(ン)ザッタガ

19

4.2. 調査結果

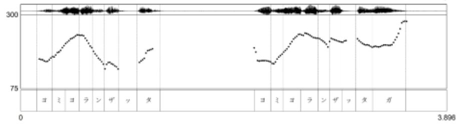

図1 ヨミヨランザッタガ「読んでいなかったガ」のピッチ曲線（話者C）

20

4.2. 調査結果

- また，ガが付くと下がり目が必ず消えるわけではない。

(7) a. HHLH ～ HHLL キテミル「着てみる」
→ HHLHH キテミルガ
b. LHHLH ～ LHHLL ヨンデミル「読んでみる」
→ LHHLHH ヨンデミルガ
c. HLLH ～ HLLL ヨーナル「良くなる」
→ HLLHH ヨーナルガ

21

4.2. 調査結果

図2 ヨンデミルガ「読んでみるガ」のピッチ曲線（話者A）

22

4.2. 調査結果

- また，次のように話者間で異なって実現するものもあった。

(8) a. HHLLL トリジャッタ「鳥だった」
→ HHLLH-H ～ HHHHH-H トリジャッタガ
b. HLLLLLL ～ HHLLLLL ～ HLLHHHH
ウゴキハジメル「動き始める」
→ HHHHHHH-H ~ HLLHHHHH ～ガ

23

4.2. 調査結果

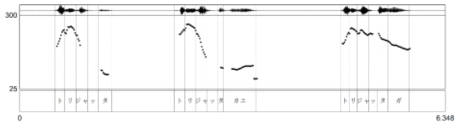

図3 トリジャッタガ「鳥だったガ」のピッチ曲線（話者B）

24

5. 考察

- (6)のようにガに先行する下がり目の削除はガからの距離に関係なく生じるから，次のように一般化できる。

(9) Hk → H0，Lk → L0 (k = 1, 2, 3, ...)

5. 考察

(6) a. LHL ヨンダ「読んだ」 → LHH-H ヨンダガ
b. HLL ヨマン「読まない」→ HHH-H ヨマンガ
c. HHL アマイ「甘い」 → HHH-H アマイガ
d. HLL ニガイ「苦い」 → HHH-H ニガイガ
e. HHLLL アマカッタ → HHHHH-H ～ガ
f. LHLLL ニガカッタ → LHHHH-H ～ガ
g. HLLLL ウゴキダス→ HHHHH-H ～ガ
h. LHHL(L)LLL ～ LHHH(L)LLL ヨミヨラ（ン）ザッタ
→ LHHH(H)HHH-H ヨミヨラ（ン）ザッタガ

5. 考察

(7) a. HHLH ～ HHLL キテミル「着てみる」
→ HHLHH キテミルガ

b. LHHLH ～ LHHLL ヨンデミル「読んでみる」
→ LHHLHH ヨンデミルガ

c. HLLH ～ HLLL ヨーナル「良くなる」
→ HLLHH ヨーナルガ

5. 考察

- (7)のように消えない下がり目は(6)のように消える下がり目と音韻的に区別される必要がある。
- 前者を低起式による低接（...H+L...），後者を核と解釈すれば，(1)の先行研究の分析が支持される。
- ガによる下がり目の消去は核によるものにしか適用されないから，この現象をガによる無核化と呼ぶことにする。

5. 考察

(6) a. LHL ヨンダ「読んだ」 → LHH-H ヨンダガ
b. HLL ヨマン「読まない」→ HHH-H ヨマンガ
e. HHLLL アマカッタ → HHHHH-H ～ガ
f. LHLLL ニガカッタ → LHHHH-H ～ガ
g. HLLLL ウゴキダス→ HHHHH-H ～ガ
h'. LHHLLLL ヨミヨラザッタ
→ LHHH(H)HHH-H～ガ

5. 考察

(8) a. HHLLL トリジャッタ「鳥だった」
→ HHLLH-H ～ HHHHH-H トリジャッタガ

b. HLLLLLL ～ HHLLLLL ～ HLLHHHH
ウゴキハジメル「動き始める」
→ HHHHHHH-H ~ HLLHHHHH ～ガ

- (8a) は話者によって「トリH0＋ジャッタL0」と「トリジャッタH2」に分かれるものと分析する。
- (8b) は動詞のアクセント自体に揺れが見られ，それに対応してガによる平板化の適用範囲が変わる。

5. 考察

- ガの無核化の記述のためにはアクセント単位が必要になることから，高知方言のアクセントを方向観に基づいて記述することは妥当。
  - しかし，アクセント単位を導入すれば，HとLによる自律分節理論に基づく分析も可能。
  - 調素観による分析も不可能ではない。

31

5. 考察

- 本発表の結果が直ちに方向観が優位に立つことを示すわけではないが，アクセント単位が方向観によるアクセント記述のための便宜上の単位でないことは示せたものと考える。
- 式（および核）の必要性については，H式をHHH…，L式をLHH…と表したのでは，両者の動態の違いを十分に記述できない点が挙げられる。H式のHH…は実際には緩やかに下降するのに対し，L式のHH…には基本的にそれが見られない。

32

5. 考察

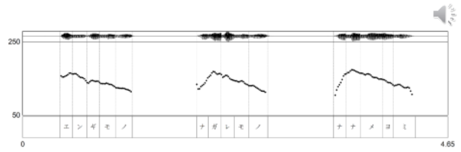

図4　5モーラH式無核のピッチ曲線（話者D）

33

5. 考察

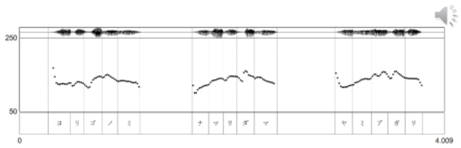

図5　5モーラL式無核のピッチ曲線（話者D）

34

5. 考察

- しかし，図5のように5モーラ以上になるとH式ほどではないがL式にも下降がしばしば観察される。
- 文末イントネーションの影響が排除できる十分な長さ(6モーラ以上？)の語に基づいて音調動態を精密に観察する必要がある。
- 低起式音調の個人差についてもデータが不十分だが，通時変化については中井(1997:　6)とは違ったプロセスが考えられそうである(LH… > LLH… > L…LHのような大幅な上昇位置の変化だけでなく，上昇後のピッチ動態も考える必要があるのではないか)。

35

付記・引用文献

- 本研究はMEXT科研費(研究課題番号21H00354)の研究成果の一部である。

引用文献

- 上野和昭(2003)「日本語アクセント史研究とアクセント観」『音声研究』7(1): 47–57.
- 上野智子(編)(2020)『日本のことばシリーズ39　高知県のことば』東京:明治書院.
- 中井幸比古(編)(1997)『高知市方言アクセント小辞典』神戸:神戸市外国語大学.
- 中井幸比古(編著)(2002)『京阪系アクセント辞典』東京:勉誠出版.

36